

# 長崎輸出の金襴手古伊万里の 生産と流通について

野 上 建 紀

はじめに

- 1 伊万里の生産開始と海外輸出
  - 2 金襴手古伊万里の生産と模倣
    - (1) 金襴手古伊万里の年代と生産地
    - (2) チャイニーズ・イマリとヨーロッパ古伊万里写し
  - 3 海外発見の金襴手古伊万里
  - 4 金襴手古伊万里の海外流通
    - (1) 17世紀後半のアジア・太平洋の伊万里の流通
    - (2) 金襴手古伊万里の海外流通
  - 5 金襴手古伊万里の輸出の終焉
- おわりに —— まとめにかえて ——

は じ め に

17世紀初頭、九州北西部で生まれた日本で最初の磁器は、誕生から半世紀も経ずに世界商品となった。当時の海外貿易港であった長崎からアジア、アメリカ、ヨーロッパ、そして、アメリカへと渡っていった。そして、その磁器は積出港の名前に因んで「イマリ」とよばれた。

そして、金襴手古伊万里とは、伊万里（肥前磁器）の色絵の一様式である。元禄頃に始まる「文様の一部を染付で描いた素地に赤と金で色絵を施すか、さらに緑・黄や紫なども加えた色絵」である（大橋1996）。

本来、「金襴手」と言えば、明代の嘉靖年間の色絵磁器の様式の一つであるが、それを模倣したものを伊万里が作った。そのため、伊万里においても金襴

手に類したきらびやかな色絵磁器を金襴手と呼んでいる。そして、中国の金襴手との混同を避けるため、金襴手古伊万里という名称が用いられている。

染付と色絵を組み合わせた意により染錦手と呼ばれたこともあり、まだ「古九谷」や「柿右衛門」が時代の様式ではなく、特定の産地や生産者の様式と考えられていた頃は、金襴手古伊万里は典型的な「古伊万里」として古伊万里様式あるいは古伊万里と呼ばれていた。

金襴手古伊万里には、主に国内向けに作られたものと海外向けに作られたものがあった。国内向けには「献上手<sup>(1)</sup>」と呼ばれる上質の色絵磁器が含まれる。必ずしも目的と市場が一致するものではなく、また明確に分けられるものでもないが、本論では海外向けの金襴手古伊万里の生産と流通について考えてみたい(図1・2)。そして、流通に関しては特にヨーロッパ以外の海外で発見された金襴手古伊万里を元にその流通を通して、17世紀末から18世紀前半にかけてのアジア・太平洋の陶磁器貿易を考えてみたい。

## 1 伊万里の生産開始と海外輸出

伊万里の誕生と海外輸出について少し説明をしておこう。16世紀末、豊臣秀吉は朝鮮半島に兵を送った。文禄・慶長の役である。朝鮮半島に渡った大名たちは帰国の際、多くの朝鮮人を連れ帰った。その中には陶工も含まれていた。朝鮮人陶工らは九州を中心に西日本各地に窯場を開いた。福岡県の上野・高取焼、山口県の萩焼、鹿児島県の薩摩焼、そして、「伊万里」の産地である佐賀県の有田焼、長崎県の波佐見焼・平戸焼(三川内焼)などはいずれも開窯に際して朝鮮人陶工が関与したとの言い伝えや文書の記載が残っている。

そして、17世紀初めには日本で生産された初めての磁器が有田辺りで生まれた。1610年代頃とされている。その後、豊富で良質な原料産地である泉山

---

(1) 陶磁器研究者の間で使用されている伊万里(肥前磁器)の色絵磁器の一様式の名称である。貴紳への献上を意図して焼造されたと考えられた色絵磁器であり、主として金襴手を主役とした高級な色絵磁器を指す。

磁石場が発見され、1630年代には磁器の量産体制が整った。磁器生産が本格化する中、東アジアの情勢変化が追い風となった。日本市場も含めて、当時の磁器市場のシェアの多くを中国磁器が占めていたが、明から清への王朝交替に伴う中国国内の混乱により中国磁器の輸出が減少した。そのため、伊万里はまず日本国内の磁器市場の中でのシェアを拡大していった。

次に海外輸出について述べよう。以下の記述は山脇 1988 に基づく。中国磁器の輸出減少による磁器欠乏は世界中に及んだため、1640年代後半には伊万里は海外市場へも進出することになった。海外輸出の記録の初見は、1647年に長崎を出帆してシャム経由でカンボジアに向かう一艘の唐船が「粗製の磁器」174俵を積んでいたというものである。粗製とは当時の中国の景德鎮の磁器と比べての表現であろう。1640年代頃の伊万里は総じて粗製に見えたことであろう。

さらに1656年には明に代わった清がなお抵抗を続ける鄭成功一派の勢力を削ぐために海禁令を公布し、いよいよ中国磁器が海外市場に出回らなくなり、市場は中国磁器の代わりに伊万里を求めるようになった。伊万里の大量輸出時代の到来である。中国磁器を商品として輸出することができなくなったため、鄭成功支配下の唐船が多数長崎に来航して、伊万里を輸出した。しかしながら、先の「粗製の磁器」という言葉が示すように、中国磁器の輸出減少によって国内外の市場で磁器が欠乏したが、伊万里が中国磁器に取って代わるには質と量ともに不十分であった。

それを克服したのが1650年代前後の有田を中心とした技術革新であり、1650～1660年代の窯場の再編成と窯業圏の拡大であった。この技術革新により景德鎮並みの技術水準の製品が作れるようになり、窯場の再編成による合理化でその技術水準を維持しながらの量産が可能になった。さらに質よりも量が求められる製品については波佐見などで窯場の数を増やし、肥前以外でも磁器を焼くことで対応した。質量ともに中国磁器の代用となるように努めたのである。

オランダ船も伊万里を輸出するようになった。1650年代は医療容器や薬用容器など実用的なものの注文が多かったが、1650年代の技術革新により技術

が向上した有田はオランダ東インド会社から多種多様な磁器の大量注文を受けることになる。1659年のことである。高品質かつ多品種の製品の生産を求められた結果、有田の生産技術はさらに向上することになった。伊万里は唐船やオランダ船によって、長崎から直接あるいは中継の港市を経由しながら、東南アジア、南アジア、西アジア、そして、アフリカのケープタウンを経てヨーロッパへと運ばれていった。

しかし、1683年に鄭氏一派が清に降伏し、清が1684年に展海令を公布して海禁を解くと中国磁器の再輸出が本格化した。その結果、伊万里の海外輸出は大きく減退していく。特に唐船は伊万里の貿易から中国磁器の貿易へと立ち戻っていき、東南アジア市場は瞬間に中国磁器に奪われていった。唐船が中国磁器の貿易に立ち戻る一方、オランダ船は長崎から伊万里を輸出し続けている。そのため、ヨーロッパ市場とオランダ船の経由地であるインドネシア<sup>(2)</sup>のバタビアへは輸出が続いた。

このように伊万里の海外輸出は、清の海禁令と展海令が画期となっているが、本論で扱う金襴手古伊万里は、展海令以後もオランダ船が輸出し続けた伊万里の一つである。

## 2 金襴手古伊万里の生産と模倣

### (1) 金襴手古伊万里の年代と生産地

海外向けの金襴手古伊万里のほとんどの製品が17世紀末～18世紀前半に焼かれたものであるが、天草の高浜焼窯の製品などは18世紀後半の製品と推測されている。

そして、その主要な生産地は有田である。特に内山地区の窯場で素地が焼かれ、赤絵町に持ち込まれて上絵付けされたものが多くを占める（図3～6、図

(2) インドネシアは当時の国名ではないが、本論においては地理的位置の理解のため便宜的に現在の国名を使用する。他の現在の国名や地域名においても同様である。

7-1~3)。金襴手古伊万里の製品が最も多く出土している生産地の遺跡は赤絵町遺跡である(図3・4)。本焼きの窯跡ではなく、上絵付けを行う工房の遺跡である。主に18世紀前半の土層や遺構から数多く出土している。本焼きを行なった窯は不明であるが、ほぼ内山の窯の製品(色絵素地)と見て間違いはない。そして、内山地区の窯場で金襴手古伊万里の製品(正確には色絵素地)が出土している窯場は、岩谷川内山の猿川窯、稗古場山の稗古場窯、本幸平山の谷窯・白焼窯、白川山の下白川窯などである(図2, 図6, 図7-1~3)。年代は大きく下がるが、文化12年(1815)に有田皿山代官の成松萬兵衛信久が定めた製品種別制度によれば、内山地区の東部の泉山・上幸平・中樽は膳附物、大樽は井と鉢、白川・幸平・稗古場は鉢井・花瓶、岩谷川内は火入れと弁当重類に専念させている(中島1936)。「各山旧来の特色を保たしむること」とあるので、それぞれが伝統的に得意としていた器種であったのであろう。例えば、白川・幸平・稗古場は、有田焼の陶祖とされる李参平の子孫である金ヶ江家一族とゆかりの深い窯場群である(野上2017)。金ヶ江家一族と関わりのある窯は17世紀の段階から瓶や壺などの袋物の比率が高い。17世紀前半の小溝窯、17世紀前半から中頃にかけての白川の天狗谷窯でも瓶や壺が多く出土する(野上2010)。いずれも文献等で金ヶ江家一族との関わりが推定される窯である。そして、天狗谷窯の操業に関わった金ヶ江三兵衛家の移転先が稗古場山であった(有田町史編纂委員会1988)。製品種別制度自体は19世紀初めに定められたが、その前提となる「各山旧来の特色」は18世紀以前に成立していたものとみられる。そのため、海外でよくみられる大瓶などの大型袋物を生産した主要な窯場は白川・幸平・稗古場であった可能性が考えられる。

その他、内山地区以外では下南川原山の南川原窯ノ辻窯、外山地区の黒牟田山の多々良の元窯、応法山の窯の谷窯、外尾山の外尾山窯などでも素地を焼いている(図7-4~6, 図8~10)。前に述べた1650~1660年代の窯場の再編成以降、外山地区の窯場は一部の窯場(大川内山や南川原山)を除いて、概して内山地区よりも品質的に劣っている。それは使用される原料の違いにもよるものである。さらに1660年代頃に上絵付け業者を集めた赤絵町が内山地区に成立したこともあり、外山地区では付加価値の高い色絵製品自体の生産が低調であった。実

際、金襴手古伊万里に先行する柿右衛門様式の色絵製品を焼いた南川原山や將軍家などへの献上品として「色鍋島」を焼いた大川内山は別として、それ以外の窯では赤絵町成立以後の色絵素地の出土は少ない。そうした中、金襴手古伊万里の色絵素地の生産が外山地区の各窯場でみられることは、急速な需要の増大に内山地区だけでは色絵素地の生産の対応ができなくなったことも考えられるし、また外山地区では大型製品の焼成を行う窯場が多かったので、大皿など比較的大型の製品の色絵素地の生産には向いていたのかもしれない。いずれにせよ清朝の展海令の公布によって、東南アジア市場を失い、海外輸出全体としては大きく減退したが、金襴手古伊万里に限っては好調を維持していたとみられる。そのため、有田だけでなく、有田以外の窯でも生産を行なっている。

有田以外では、嬉野市塩田町の上福2号窯や天草の高浜焼窯などで金襴手古伊万里を生産している（図11・12）。実際に輸出されたものは非常に少ないと考えられる。

上福2号窯の出土遺物をみると、オランダ向けとみられる染付芙蓉手皿の他、金襴手古伊万里のカップの色絵素地がみられる（図11）。窯の上方に「享保十九年 甲寅 九月 吉日 喜多惣左衛門」の銘のある石碑があり、享保19年（1734）に開窯あるいは操業していた可能性が高いが、『蓮池藩請役所日記』に「元文二年二月二十五日 塩田町 池田与左衛門儀、かねて御法度の焼き物に赤絵を仕立て、阿蘭陀向きの陶器を長崎表に差し越しの儀、顕然につき、御糺しの上、御呵り閉戸仰せつけられ候旨、佐嘉筋々より書き付けを以て相達しこれあり候」と記録されており（塩田町教委1998）、元文2年（1737）にオランダ向けに色絵製品を焼成したことが露見し、処罰を受けていることがわかる。色絵を焼いたのは短期間とみてよい。

一方、天草の高浜焼窯は宝暦12年（1762）に大村藩の長与の陶工を招いて開かれた窯であり、明和3年（1766）から安永7年（1778）にかけて、オランダ向けの製品の焼成を試み、販売に漕ぎ着けている（中山2016）。あまりうまくいかず、まもなく「出島出店」<sup>(3)</sup>を取りやめているが、当時の製品とみられ

(3) 具体的にどのような形式の出店であったかは不明である。

る金襴手古伊万里の色絵大壺が伝世している（図12）。18世紀前半の有田の色絵大壺などを参考にして焼いたものと思われるが、すでに意匠的には半世紀ほど遅れたものとなっている。技術的に前代の有田に劣るといふより、同時代のヨーロッパの金襴手古伊万里写しに大きく見劣りしたことで商品価値があまり見出されなかったのかもしれない。

## （2）チャイニーズ・イマリとヨーロッパ古伊万里写し

金襴手古伊万里の需要の増大によって、有田の内山から外山、そして、有田以外の窯場へと生産地が拡大して行ったが、金襴手古伊万里の様式の直接的あるいは間接的な影響を受けた陶磁器が、中国そしてヨーロッパで生産されている。マイセンをはじめとしたヨーロッパの磁器窯が好んで柿右衛門様式の伊万里を模倣したのに対して、景德鎮が柿右衛門様式の伊万里を模倣した例は少ない。柿右衛門様式の年代の主体が1670～1690年代と金襴手古伊万里よりも相対的に古い年代であったためである。海禁政策下であっても公布当初と異なり、1670年代には中国磁器も海外に相当量、輸出されていたが、それらは海外向けに特化して作られたわけではなく、中国国内に流通していた磁器が輸出の担い手を得た時に海外に出回っていたのである（野上2015）。そのため、輸出品の中に柿右衛門様式の色絵磁器を模倣したものがなかった。海禁令によって、沿岸部の輸出の担い手と内陸部の生産の担い手との受注や市場の情報を共有する関係が途絶えていたのであろう。展海令が公布され、海禁が解かれるとその関係が修復され、海外向けの製品の受注関係が生まれた。その一つが金襴手古伊万里の模倣の生産である。

金襴手古伊万里の模倣を行ったのは、主に中国とヨーロッパであった。中国は磁器で模倣し、ヨーロッパでは磁器だけでなく、陶器でも模倣された。写真等ではほとんど産地の判別ができないほど類似したものもある一方、文様や構成をアレンジしたものや色構成のみを取り入れたものもある。後者の判別は容易であるが、前者については胎土や釉調を観察して判別することになる。

金襴手古伊万里の影響を受けて、中国の景德鎮で生産された色絵磁器はいわゆる「チャイニーズ・イマリ」とよばれるものである。忠実に模倣したのもの

あれば、単に染付と色絵を組み合わせることで雰囲気を似せただけのものもある。広義のチャイニーズ・イマリまで含めると、量的には本歌<sup>(4)</sup>を圧倒するほど生産されている。伝世品においても出土品においてもそれは確認できる。年代の推定が可能な資料として、以下、沈没船資料をいくつかみてみよう（野上 2002）。まず 18 世紀前半の雍正年間（1723-1735）頃にベトナムのカマウ沖で沈んだ船に伴う資料の中にティーポット、小皿、碗、蓋などのチャイニーズ・イマリが見られる。1743 年にスウェーデンのヨーテボリ沖で沈んだヨーテボリ号に伴う資料の中にもバタビアン・ウエアとともに少量チャーニーズ・イマリの色絵カップが見られる。さらに 1752 年にシンガポール沖で沈んだとされるヘルデルマルセン号にも碗、皿、バター入れ、唾壺、チョコレートカップ、ティーカップ、コーヒーカップと各ソーサー、マグカップなど多様なチャイニーズ・イマリが見られる。同形、同サイズ、同文様の染付、色絵とセットになっているものが多い。ちなみにヘルデルマルセン号からは金襴手古伊万里の色絵髭皿が発見されている。このヘルデルマルセン号の引き揚げ資料は、商業的サルベージによるものであり、学術資料として考古学的情報の信憑性に疑問符がつくものであるが、このヘルデルマルセン号の沈没年に近い年代の「1758 年度陶磁器製品の請求」がデンハーグの古文書館に保存されており、請求書に掲載されている見本図と引き揚げ資料はおおよそ一致することから、18 世紀中頃の貿易品と見てよからう。

そして、「1758 年度陶磁器製品の請求」は、三杉隆敏が撮影・邦訳を行っており（三杉 1986）、その中からチャイニーズ・イマリとみられるものを抜粋する。

「壺 50 個 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「壺 100 個 チャイニーズ・ジャパニーズ たつぷりと金箔を着せたもの」

「ブイヨン用カップ 500 個 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「スープ碗 100 個 チャイニーズ・ジャパニーズ たつぷり金箔で飾る

(4) 陶磁器など美術工芸品の模倣の元となったものをさす。



こと」

「ミルク壺 100 個 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「ココア用カップ取手付 1000 個 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「同 2000 個 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「オランダ紅茶セット 3000 組 チャイニーズ・ジャパニーズ」

「卓上皿・シングル 5000 組 赤, 青, たっぷり金箔をほどこしただけの  
チャイニーズ・ジャパニーズ」

「卓上皿・ダブル 3000 枚 多彩かチャイニーズ・ジャパニーズ, 人物,  
鳥, 動物等不用, 金箔はたっぷりの事」

三杉は、「チャイニーズ・ジャパニーズ」<sup>(5)</sup>について、「中国製の日本風の型か文様のものか?」としているが、金箔による装飾の記載があるものについては、中国製の金欄手、すなわちチャイニーズ・イマリとみて間違いはない。それでは金箔の記載がないものはどうか。ココア用カップ取手付を例にみていく。ココア用カップ取手付は、チャイニーズ・ジャパニーズ以外に「2000 個 染付」, 「4000 個 染付」, 「1000 個 多彩色 (エナメル)」の記載がある。同じ器種で染付, 多彩色, チャイニーズ・ジャパニーズの三つの種類があることがわかる。それらを同時代の沈没船資料であるヘルデルマルセン号の資料と対照させると、それぞれ染付のみの装飾のもの、白磁に色絵のみの装飾のもの、染付と色絵を組み合わせた装飾のもの三種類であることがわかる。チャイニーズ・ジャパニーズの呼称から推測すると、当時、染付と色絵を組み合わせた装飾が日本磁器に由来することは認識されていたようである。

続いて1761年にフィリピン沖で沈んだグリフィン号にも染付と色絵を組み合わせた製品が発見されているが、様式的にチャイニーズ・イマリとよんでよいか難しい。ただし、染付を用いず、色絵のみで金欄手古伊万里を模倣した製品は見られる<sup>(6)</sup>。

金欄手古伊万里を模倣したのは、景德鎮だけではない。ヨーロッパでは早く

(5) 筆者自身は原語表記を確認できていない。

(6) 中国磁器かヨーロッパ産陶磁器か写真では判別が難しい。

から中国磁器を模倣した陶磁器を生産していた。最初はデルフト焼などの陶器で模倣したものが生産されていたが、18世紀初めにマイセンでヨーロッパ最初の磁器が誕生すると磁器でも模倣するようになった。オランダ貿易によって大量の伊万里がヨーロッパに渡ると、伊万里の模倣も始まった。特に柿右衛門様式の色絵製品は好んで模倣された。一見しただけでは伊万里と区別ができないほど忠実な模倣が行われている。柿右衛門様式の色絵製品に次いで金襴手古伊万里の製品も模倣されるようになった。ただし前に述べたように量的にはチャイニーズ・イマリが圧倒しているので、伊万里ではなく中国磁器を手本に模倣したものも多かったであろう。

### 3 海外発見の金襴手古伊万里

海外で金襴手古伊万里が最も多く残っている地域は、改めて言うまでもなくヨーロッパである（図1）。本来、海外向けの金襴手古伊万里はオランダ東インド会社が欧州向けに有田に注文して焼かせたものであり、これらはヨーロッパの王宮や宮殿などを飾り、現在まで多くのコレクションが残されている。代表的なものとして、ドレスデンのツウインガー宮殿の伊万里コレクションなどが挙げられる。伊万里のコレクション全体の中でも金襴手古伊万里の占める比率は高く、展海令以後であっても多くの伊万里がヨーロッパに渡ったことがわかる。

一方、ヨーロッパ以外で発見されている金襴手古伊万里は、トルコのトプカプ宮殿、ケニアのモンバサのフォート・ジーザス、南アフリカのケープタウンのウィリアム・ファーコレクション、インドネシアのバタビア、バンテン・ラーマ遺跡、チルボンの聖廟、ブトンのウォリオ城、メキシコシティの市内遺跡、メキシコシティ郊外のカサ・デル・リスコ、オアハカのサント・ドミンゴ修道院遺跡、グアダハラの大聖堂、ベラクルスの市内遺跡の出土品や製品、ハバナの博物館コレクションなどである。器種は壺、大皿、カップアンドソーサーが主である。

これらの中で、ケープタウンとバタビアの出土品や製品については、オランダ東インド会社のアジアにおける本拠地や船の補給基地であるため、オランダ

東インド会社が運んでいた金襴手古伊万里の製品の一部分が残されていたと考えるのが妥当であろう。

問題となるのは、それらの都市以外で発見されている製品である。それらを地域・海域で分けると、①インド洋海域および中近東（トルコのトプカプ宮殿、ケニアのモンバサのフォート・ジーザス）、②インドネシア周辺の東南アジア（バンテン・ラーマ遺跡、チルボンのスナン・グヌンジャティ廟、プトンのウォリオ城）、そして、③メキシコを中心とした中南米（メキシコシティの市内遺跡、メキシコシティ郊外のカサ・デル・リスコ、副王領博物館、オアハカのサント・ドミンゴ修道院遺跡、グアダラハラの大聖堂、ベラクルスの市内遺跡、キューバのハバナ）に大きく分けられる（図1）。

まず地域・海域ごとに発見された金襴手古伊万里について紹介する。

#### ①インド洋海域および中近東

トルコのイスタンブールのトプカプ宮殿には約 800 点の日本陶磁がある（トゥンジャイ 1995）。大橋康二は全てを見たわけではないと断った上で、18 世紀前半のものが多くとしている（大橋 1995）。その主体となっているのが金襴手古伊万里の製品群である（図 14）。色絵鉢、輪花鉢、大鉢、大皿、蓋付鉢、蓋付大壺、蓋付八角大壺、瓢形瓶、蓋付三足鉢、鶴首瓶、八角筒形瓶などが図録に掲載されている（佐賀県立九州陶磁文化館 1995）。いずれもヨーロッパに輸出された伊万里と共通のものである。

ケニアのモンバサは、アフリカ内陸部との象牙貿易と、その象牙を対価としたインド洋交易で栄えたスワヒリ都市である。インド洋に進出してきたポルトガルによって破壊され、1593 年にポルトガルによって強固な要塞フォート・ジーザスが築かれ、その支配下に入った。1698 年にはポルトガル勢力は駆逐されるが、代わってオマーンの支配下に入った。モンバサおよびその周辺では中国磁器を中心としたアジアの陶磁器が発見されている。江戸期の伊万里も 2 点含まれている。一つは 17 世紀後半の染付芙蓉手皿、もう一つは金襴手の色絵大壺である（図 13）。本来は蓋付であるが、蓋は残されていない。染付された色絵素地に赤・黒・金の絵具で上絵付けされたものである。染付で区画され

た窓の中に、松梅鶴文や菊花文が描かれている。

## ②インドネシア周辺の東南アジア

インドネシアのジャワ島西部に位置するバンテン遺跡は16世紀から18世紀にかけて栄えたイスラームのバンテン王国の都であった。そして、バンテン・ラーマ遺跡はその中心的な港市遺跡である。発掘調査によって膨大な陶磁器が出土しており、伊万里も1500点ほど確認されている。その内の1000点ほどが17世紀のもので、500点ほどが18世紀のものである。その内、金襴手古伊万里の色絵ソーサーが320点ほどみられる（図15）。色絵栗鶉文壺の蓋、色絵菊文鉢の蓋、色絵花盆文鉢、色絵牡丹文皿、色絵花鳥文段重、色絵髭皿も含まれている。

チルボンはインドネシアのジャワ島の西ジャワ州の都市である。ジャカルタの東300kmに位置している。チルボンのスナン・グヌンジャティ廟に伊万里が残されている。スナン・グヌンジャティはイスラーム聖者として知られ、彼の廟の一般巡礼者が礼拝する箇所の前にあたる内陣壁の外面には数多くの陶磁器が埋め込まれている（坂井2010）。そのほとんどは18世紀の中国陶磁とデルフトタイルであるが、内陣入口の脇に金襴手古伊万里の色絵大壺が2点据えられている（図17）（坂井2010）。その他にも窓絵菊花文の蓋付き色絵大壺やアーンとよばれる色絵ポットなどが廟内に配置されている（図17）。

インドネシアのスラウェシ島の南東側に接するブトン島に残るウォリオ城の修復や発掘により多量の陶磁片が出土している。磁器に関して記すと、13～15世紀前半頃の中国龍泉窯の上質な青磁が少量含まれる他、主に16世紀以降の江西省の景德鎮窯、福建省の漳州窯・徳化窯の染付や白磁、色絵が出土している。そして、17世紀後半～18世紀前半の伊万里の染付、青磁、色絵も出土している。その中に18世紀前半の金襴手古伊万里の色絵大壺の蓋と身、大瓶が含まれている（図16）。

## ③メキシコを中心とした中南米

メキシコシティは、ヌエバ・エスパーニャの政治・経済の中心として繁栄し、

現在のメキシコ合衆国の首都である。1960～1970年代の地下鉄工事で出土した陶磁器片の中から伊万里が発見されている。三杉隆敏が最初に伊万里の出土を確認した（三杉1986）。三杉が発見したものは4点の染付芙蓉手皿の破片であり、金襴手伊万里の破片については言及していない。しかし、三杉が中国磁器として紹介している色絵片の写真の中にも、筆者は伊万里が含まれていることを発見した（野上2013）。それが金襴手古伊万里の色絵壺（瓶）の破片である（図18-1）。馬文を陽刻した色絵素地に牡丹や桜文が描かれている。その他、メキシコシティの市内遺跡では菊花文を上絵付けしたカップアンドソーサーが出土している（図18-2～5）。

メキシコシティ郊外のサン・アンヘル地区にあるカサ・デル・リスコの中庭には陶磁器や貝殻を壁面にはめ込んで装飾を施した噴水が残っている（図20）。18世紀後半に作られたと考えられているが、1930年代になって修復・復元作業が行われた際に、新しい陶磁器が欠落部分に埋め込まれていったという（たばこと塩の博物館2009）。この噴水についてはかつて三上次男によって紹介されている。それには「大小無数の中国陶磁とスペイン陶器・スペイン系陶器それに貝殻を組み合せて、高さが四メートルもあるバロック風の壁面装飾を作り上げたものである。この壁面ができたのが1734年だということから、ここにはめこまれている中国陶磁は、当然それ以前ということになる。」とある（三上1988）。1734年制作の根拠は確認できなかったが、諸説ある内の一つであろう。三上の紹介の中に伊万里に関する記述は見られないが、筆者が確認したところ、少なくとも10数点の伊万里の陶片がはめ込まれている。伊万里の年代は、17世紀後半～18世紀前半のものであり、壁面の制作が18世紀後半としても1734年としても矛盾はない。そして、はめ込まれた伊万里の中に金襴手のチョコレートカップの蓋が2点含まれている（図20）。壁面中央にある凹みの両脇に一つずつ埋め込まれている。現在の編年観では18世紀前半に有田で焼かれたと推定されるものであり、おそらく壁面の制作当初からはめ込まれていたものであろう。その他、副王領博物館にも金襴手の色絵チョコレートカップが所蔵されている（図19）。

オアハカはメキシコのオアハカ州の州都である。市内の歴史地区は世界遺産

に登録されている。歴史地区内のサント・ドミンゴ修道院の発掘調査で数多くの伊万里が出土しており、その一部はオアハカ文化博物館で展示されている。サント・ドミンゴ修道院で出土した伊万里の大半は17世紀後半の染付芙蓉手皿と染付や色絵のチョコレートカップであるが、18世紀前半の金襴手のソーサーとみられるものが少量出土している（図18-6）。有田の内山地区で焼かれた色絵素地に赤絵町で上絵付けされたものである。

ベラクルスはメキシコ湾岸に位置する港町である。新大陸からスペイン本国に向けての出発港であった。新大陸の品々はベラクルスから積み出され、ハバナ（キューバ）を経てスペイン本国へ向かい、ヨーロッパの品々はベラクルスで荷揚げされていた。このベラクルスの市内の遺跡からは金襴手の小皿が出土している（図18-7）。チョコレートカップのソーサーと推測される。

グアダラハラは、メキシコ中央高原の北西部に位置するメキシコ第2の都市であり、ハリスコ州の州都でもある。その歴史地区の中心部に大聖堂があり、その聖具室に一对の色絵大壺が残る（図21）。聖具室正面のキリスト像を挟んで配置されている。本来は蓋付の壺であるが、蓋は見られない。通常、長瓶2本と大壺3個の5個体で1セットであるが、グアダラハラの大聖堂では壺2点のみ所蔵されている。胴部には区画された枠内に桜花文、牡丹文が描かれ、肩部には染付の青地に白抜きされた部分に唐獅子と牡丹が描かれている。また頸部には菊花と牡丹、底部近くにも同様の文様が入る。

ハバナは、スペイン植民地時代、スペインに帰航する船団の集結地となり、カリブ海随一の重要港であった。由来は不明であるものの、ハバナ市博物館や「アジアの家」博物館などに金襴手古伊万里の色絵壺とみられる壺が所蔵されている（図22）。

#### 4 金襴手古伊万里の海外流通

次に海外向け金襴手古伊万里の流通について考える。海外向け金襴手古伊万里は、オランダ向けの商品として有田が生産したものであり、オランダ東インド会社はそれらをヨーロッパに運ぶために長崎で購入した。そのため、金襴手

古伊万里の主要な輸出ルートは、オランダ船によって長崎から積み出され、インドネシアのバタビアに運ばれ、インド洋を横断し、ケープタウンを経由してヨーロッパへ運ばれるルートであった。

しかしながら、前に述べたようにこの主要ルート上に位置しない場所においても発見される金襴手古伊万里が存在する。すなわち、①インド洋海域および中近東、②インドネシア周辺の東南アジア、そして、③メキシコを中心とした中南米で発見された金襴手古伊万里である。

ここでは主要ルート以外のルートによる金襴手古伊万里の流通をみていきたい。まずは①から③の海域・地域の伊万里の陶磁器交易について、前代の17世紀後半の状況からみてみようと思う。なお、①と②の海域についての文献資料を元にした記述は山脇 1988 に基づく。

#### (1) 17世紀後半のアジア・太平洋の伊万里の流通

##### ①インド洋海域および中近東

山脇悌二郎は、長崎商館の仕訳帳にみる伊万里の輸出先および輸出量を集計している。インド洋に面した南アジアや西アジアへの輸出は1658年のベンガル商館宛に457個送った記録が最初であり、その翌年から輸出量は増大し、1681年まで大量にインド洋方面へ送っている。輸出した陶磁器の種類をみると、碗・茶碗が最も多く、中皿・大皿・盛り皿などの皿類がそれに次ぐ。それらに平鉢・鉢・猪口皿などを加えるとほぼ99%を占める。

そして、送り先の内訳は、セイロン商館 29,789 個、ベンガル商館 18,886 個、スラッテ商館 185,862 個、コロマンデル商館 3,990 個、ペルシア商館 102,055 個、モカ商館 21,567 個、マラバル商館 5,253 個、コチン商館 1,100 個の合計 368,502 個である。これに送り先は不明であるもののインド洋方面に向けられたと推測されるマラッカ経由の 111,455 個を加えると 479,957 個となる。長崎商館仕訳帳にみるオランダ東インド会社の輸出量が 1,233,418 個であるため、インド洋に面した南アジアや西アジアに向けられたものは計算上、全体の 38.9%、約 4 割を占めていることになる。もちろん、これはオランダ東インド会社の公式貿易、すなわち会社の貿易のみの数字であり、オランダ東インド会

社の私貿易である脇荷貿易や唐船によって輸出されたものが東南アジアの港市を中継して南アジアや西アジアに運ばれたものは含まれていない。

相当量の伊万里がインド洋に面した南アジアや西アジアに輸出されたとみられるものの、この地域で発見されている伊万里は非常に少ない。出土品や採集品では、南インドのプリカットで採集された染付芙蓉手皿（山本 2010）、同じく南インドのゴアで出土した染付芙蓉手皿（佐々木 2010）、スリランカのゴール沖で沈んだアーフォントステル号に伴う染付芙蓉手皿や染付アルバレロ壺ぐらいであり（野上・パイルケイトル 2010）、西アジアではまだ確実な例は確認されていない。伝世品についても知られているものはあまり多くなく、佐々木達夫が紹介しているスリランカのコロombo国立博物館所蔵の染付芙蓉手皿（Sasaki 1989）、三杉隆敏が紹介しているモルディブ島の青磁大皿、イランのメシェドの染付草花文皿、インドのレッド・フォートの染付芙蓉手皿、ペイルートで発見されたと伝えられている数枚の染付芙蓉手皿（三杉 1986）があるに過ぎない。ただし、このことはこの方面への輸出が少なかったことを示すものではなく、記録上、最も多いとされる碗・茶碗がみられないことから、まだ調査が十分に行われていない結果と考えた方がよいであろう。

次にインド洋に面したアフリカへ輸出された伊万里についてみる。エジプトのフスタート遺跡で柿右衛門様式の色絵碗（コーヒーカップ）、ケニアのモンパサのフォート・ジーザスで染付芙蓉手皿、タンザニアのキルワ・キシワニ遺跡で染付芙蓉手皿が出土している。その他、大陸部ではないが、オランダ船の補給基地であったモーリシャスのフレデリック・ヘンドリック城の遺構 F3382 と F3383 では数多くの伊万里が出土している。ただし、大半は白磁や染付の薬瓶や薬壺であり、少量、染付碗や染付芙蓉手皿の破片が見られる（金田 2010）。

続いて西アジアとヨーロッパにまたがるトルコのトプカプ宮殿には世界有数の陶磁器コレクションがある。前に述べたように伊万里は 18 世紀前半の製品が主体となっているが、17 世紀後半のものも数多く残されている。入手経路について、大橋康二は 17 世紀後半と 18 世紀前半で異なる経路を推測している。18 世紀前半については後述するとして、17 世紀後半については、コレクシ



ンの中にヨーロッパではほとんど見られない伊万里の青磁大皿などが見られることから、ヨーロッパを経由するのではなく、ペルシア湾、紅海側からのルートと推定している。そして、オランダの記録から見ても、トルコ商人が取引にかかわっているのはモカだけであり、ペルシア湾側にはないことから紅海側から入った可能性が強いと結論づけている（大橋1995）。

以上がインド洋海域および中近東で発見されている17世紀後半の伊万里である。モーリシャスは17世紀にはオランダ船の中継・補給基地であったため、出土している伊万里はオランダ船によって運ばれたものと考えてよいが、その他のものについては明らかではない。オランダ東インド会社の長崎商館の仕訳帳の記録にあるとおり、オランダ船が伊万里を運んでいたことは確かであるが、インド洋で交易活動を行っていたのはオランダだけではない。1698年にモンパサのフォート・ジーザスを放棄するまではポルトガルが東アフリカのインド洋交易を支配しており、フォート・ジーザス出土の染付芙蓉手皿などはポルトガル船によってもたらされた可能性が高い。また、インド洋の交易活動はポルトガルの支配を受けるようになったとはいえ、許可証をもらい、関税を支払えば、制約付きで通商活動を行うことが許されたし、インド洋と紅海の間では密輸船が横行していたため、以前ほど自由ではないものの、従来の交易も途切れることなく続いていたという（福田2018）。従来の交易とはポルトガルなどヨーロッパ諸国がインド洋交易に参入する以前から活躍していたイスラーム商人やインド系商人による交易である。例えば、坂井隆は、1664年にマチリパッタムの南にあるヴェロール王国のプリカットに地元の船がマラッカから6ケースの伊万里を運んでいることを挙げている（坂井1998）。前に述べたようにプリカットからはまさに1660～1670年代の伊万里の染付芙蓉手皿が採集されている。また、同年、南インド西海岸ビジャール王国のヴェングルラからイスラーム教徒の船18艘が1600個の磁器をモカに運んできたこと、1670年ジャワのバンテン王国スルタンの船が大量の磁器を積んでスラットに出港していることを挙げ、モカなど西アジアに伊万里を運んだのはオランダだけではないとし、さらにイスラーム教徒を中心に形成されていたインド・インドネシアを結ぶ環インド洋貿易圏の一部に短時間オランダが参入したにすぎないと述べ

ている（坂井 1998）。

## ②インドネシア周辺の東南アジア

前述したように、伊万里の海外輸出の初見は東南アジア向けであった。1647年に長崎を出帆して、シャム経由でカンボジアに向かった唐船が運んだ伊万里についての記録である。1640年代頃の伊万里については、これまでベトナムのホイアンから染付瓶、インドネシアのバンテンから染付手塩皿などの出土が確認されている（大橋・坂井 1994）。そして、1651年にはトンキン華僑の船が「かなりな量の粗製磁器」を輸出している。

オランダ船も早くから伊万里を東南アジアへ運んでいた。1650年10月15日、オランダ船ウイッテン・ファルク号はトンキンのオランダ商館に届ける「種々の粗製磁器 145 個」を積んで長崎を出帆し、翌 1651 年にはオランダ船カンペン号も「176 個の日本製の磁器平鉢、皿、瓶」をトンキン商館に積送している。すなわち、伊万里ははじめインドシナ半島に向けて輸出された。

やがて清朝によって海禁令が公布され、伊万里の海外輸出が本格化する。海禁令によって中国磁器の輸出が困難になり、鄭成功らは中国磁器の代わりに伊万里を輸出し始めたからである。そのため、1656年に海禁令<sup>(7)</sup>が公布された翌年に長崎に来航した 47 艘の唐船のうち、38 艘は鄭成功の根拠地の安海から来たもので、その他のカンボジア船 11 艘、シャム船 3 艘、広南船 2 艘、パタニ船 2 艘、トンキン船 1 艘も「全て大貿易家国姓爺とその与党に属する船」であったという。国姓爺とは言うまでもなく鄭成功のことである。1658年11月5日から8日までに長崎を出帆した 7 艘の唐船は大量の各種粗製磁器を積んで全て廈門と安海に向かっている。以後、伊万里は東南アジア一帯に流通するようになり、東南アジア各地の遺跡の発掘調査によって、17世紀後半の伊万里が出土している。

(7) 『順治實録』十二年（1655）六月壬申「兵部議覆。浙閩總督屯泰疏言。沿海省分。應立嚴禁。無許片帆入海違者立置重典。從之」の記述に従えば、海禁政策の開始年は 1655 年となるが、本論では山脇氏の記述に従った。

このように17世紀後半の東南アジアは伊万里の主要な市場であった。オランダ船も唐船も伊万里を東南アジアへ運んだ。オランダ船はアジア各地のオランダ東インド会社の商館に向けて伊万里を輸出した。とりわけオランダ東インド会社のアジア拠点であるバタビアへ大量に運んだ。ただし、バタビアで全てが消費されるわけではなく、バタビアを中継してさらに他の地域へ運ばれるものを多く含んでいた。バタビアは東南アジアの陶磁器の集散地でもあったのである。一方の唐船は専ら東南アジアに伊万里を運んだ。インドネシアの他、ベトナム、ラオス、タイ、カンボジア、マレーシアの各地に輸出している。長崎から直接、唐船によって目的の消費地に運ばれるものもあれば、バタビアなどアジアの陶磁器集散地を経由して各地の消費地に運ばれるものもあった。

### ③メキシコを中心とした中南米

中南米の域内の取引の担い手は、スペイン人である。日常の生活物資や近距離間の取引では地域的な取引形態が存在したと考えられるが、アジアから輸入された奢侈品の中長距離間の取引はスペイン人によるものである。また、アジアにおける植民地であるフィリピンと中南米、すなわち、マニラとアカプルコを結ぶ取引の担い手もスペイン船である。それは19世紀初頭にガレオン貿易が終焉を迎えるまで変わることはなかった。

マニラとアカプルコ間はスペイン船が往来したとして、長崎からマニラへの担い手は何であったか。まずいわゆる「鎖国」が完成した後はもちろん、1624年に通航を禁じられて以来、スペイン船は長崎に入ることはできない。長崎に入ることができる船は唐船とオランダ船である。オランダはスペインと敵対していたため、オランダ船はマニラに入ることはできない。つまり、長崎とマニラの両者に入ることができるのは唐船ということになる。しかしながら、唐船が長崎からマニラへ直接、伊万里を運んだ記録はみられない。つまり、どこかに中継地があることが想定される。

鄭成功らが伊万里の海外輸出において果たした役割を考えると、鄭成功らの根拠地がその中継地であった可能性を考えることができる。廈門はマニラ方面に向かう出洋貿易船の基地でもある。つまり、長崎からマニラへは廈門など鄭

成功の支配下の港市を經由してマニラへ輸入された可能性を考えることができる。まだ資料数は乏しいが、厦門に近接した金門島では1650年代頃の伊万里の染付芙蓉皿が採集されており（盧・野上2008）、類品はマニラでも出土している。長崎から厦門や安海、金門島など大陸側の港市を經由してマニラへ運ばれるルートが1650年代頃にはあったと考えられる。そして、1660年代になると新しいルートが生まれる。鄭成功が根拠地を変えるからである。1661年に鄭成功は台湾のオランダ勢力を攻撃し、1662年には台湾長官のフレデリック・コイエットは降伏するが、鄭成功も同年に没した。そして、同年オランダ艦隊は清の海軍に協力して、鄭成功の子の経が拠る厦門、金門島、銅山島を攻略したため、鄭氏一派は根拠地を台湾（台南）に移したのである。根拠地を台湾に移した結果、長崎からマニラへのルートは台南を經由するものとなった。台南では1660～1680年代の伊万里が出土するが、その中には染付見込み荒磯文碗などの東南アジア向けの製品や染付芙蓉手皿などのヨーロッパ世界向けの製品も含まれていた（野上ほか2005）。後者はマニラで最もよくみられる伊万里の製品のひとつである。これらは台湾そのものに需要があるものではなく、台南を經由してさらに次の目的地へ運ばれるものであったことは明らかである。

この長崎－台南－マニラの輸出ルートは、文献資料においても確認することができる。方真真是スペイン・セビリアに残るマニラの税関記録の調査を行い、その成果を発表している（方2006）。調査した記録は1657年から1684年間のフィリピン群島に関するものであるが、方はその中でも台湾に関わりのある部分を分析している。それによると台湾の大員（現在の台南安平）からマニラに至った商船の記録の初見は1664年である。すなわち、鄭成功一派が台湾に根拠地を移した直後から記録が見られる。そして、1684年までの約20年間に51艘の船が台湾からマニラへ至っている。主要な目的は商業貿易である。長崎－台湾－マニラ、あるいは中国－台湾－マニラの中継貿易を行なっていることがわかる。清朝による海禁政策下にはガレオン貿易そのものにとって重要な役割を担っていたと考えられる（野上2017）。

マニラに輸入された商品の内容も興味深いものである。日本の産物や商品が数多く含まれている。特に銅、鉄などの金属は日本がその主要な産地であった。

そして、陶磁器に関する記録も多く見られる。例えば1681年1月8日にマニラに輸入された商品の中には精緻な大皿（盤子）160 梱（每梱30個）、小碗75 梱（每梱100個）が含まれている。その他、以下の記録も見られ、日本製と明記された皿類（platos de Japón）もマニラに運ばれていることがわかる。

1665年4月18日 茶壺

1666年4月2日 日本製大皿（盤子）

1668年4月5日 大皿

1672年4月19日 碗

1682年2月18日 大皿（盤子）10 梱（每梱30個）、チョコレートカップ  
1000 個

1683年4月11日 精緻な大皿60 梱（每梱30個）

1684年1月31日 碗10 桶（每桶50個）

1684年3月4日 盛湯用100 梱（每梱20個）

また、日本から台湾を経由してマニラに至る1671年、1683年、1684年の5艘の商船にも多くの商品が積載されていた。すなわち、「銅、綿花、釘子、生鉄、飼料、松木厚板、松木、木棍、木排、大皿、碗、鍋（後略）」などである。この大皿、碗なども伊万里である可能性が高い。

鄭氏一派は、1683年に清朝に降伏し、1684年には海禁を解除する展海令が公布された。1656年の海禁令の公布から1684年の展海令の公布まで、中国磁器の海外輸出が抑制されていた中、伊万里の唐人貿易による輸出の主要な担い手が鄭氏一派であった。そのため、鄭氏一派が大陸側に根拠地を置いた時期は、長崎－廈門・安海・金門－マニラという経路をたどり、台湾に根拠地を移した時期は、長崎－台南－マニラという経路をたどったことがわかる。

また、太平洋を渡った伊万里をマニラに持ち込んだ船が唐船であったことが明らかになると、唐船が東南アジアの市場向けの商品のみを扱っていたわけではないことがわかる。唐船の活動範囲は、東シナ海、南シナ海に限られるとしても扱う商品はその市場内にはとどまるものではなく、ヨーロッパ市場、アメリカ市場やインド洋方面の市場向けの商品も運んでいた。唐船がマニラに持ち込み、スペイン船がマニラからメキシコに運んだチョコレートカップなどはも

ちろん東南アジア向けの商品ではない。唐船が東南アジアの港市に運んだ伊万里は、それらの港市を中継しながら、インド洋以西に運ばれ、あるいは太平洋を越えて運ばれていた。

## (2) 金襴手古伊万里の海外流通

17世紀後半の各海域の伊万里の流通をみてきた。明から清への王朝交替に伴う混乱に始まり、清朝の1656年の海禁令によって本格化した伊万里の海外輸出も1684年の展海令によって大きく減退していった。金襴手古伊万里の輸出は海外輸出が全体として減退する中で行われた。

それでは17世紀後半と17世紀末～18世紀前半とでは、交易形態は具体的にどのように変化したか。この両者の最も大きな違いは、展海令を境とした唐船の活動内容の違いと言える。長崎から伊万里を輸出することができるのは、唐船とオランダ船であったが、オランダ船については展海令以後も継続して輸出を行っている。それが海外向け金襴手伊万里の主要な輸出ルートであることはすでに述べたとおりである。そのため、ここでは①～③の海域や地域で発見された金襴手古伊万里の流通経路とその担い手を考えながら、18世紀前半の陶磁器貿易を見てみたい。

### ①インド洋海域および中近東

インド洋海域および中近東で最も多くの金襴手古伊万里のコレクションが残されているのは、イスタンブールのトプカプ宮殿のコレクションである。コレクションの18世紀前半の製品について、大橋康二はヨーロッパに輸出された伊万里の特色と同様であることから、オランダ本国を経由して入ったものとしている（大橋1995）。ヨーロッパに輸出された18世紀前半頃の伊万里の流通量をうかがわせるコレクション数について、明治以降に美術品や骨董品として収集したものを除くと、量的に多いのはオランダ以外ではドイツ、次にイギリスであり、ドイツから東、ロシア方面にあり、また量的には減るものの東南方にチェコ、オーストリア、ハンガリーと分布しているとする（大橋1995）。このドイツから東への流通の拡がりの端にトプカプ宮殿の伊万里コレクションがあ

るとしている（大橋 1995）。

根拠として、ヨーロッパに輸出された伊万里の特色と同様であることを挙げているが、これ自体を根拠とすることは難しい。本来、ヨーロッパ向けに生産したもののばかりであるため、いずれのルートを通ったとしてもヨーロッパにおける特色と同様になるからである。ヨーロッパ諸国の一つであるスペインの植民地であった中南米はもちろん、インドネシア周辺で発見されている伊万里もまた基本的にヨーロッパにおける特色と同様である。

オランダ本国経由で入った可能性を否定するものではないが、別ルートによる輸入の可能性も提示することが可能である。それは 17 世紀後半と同様にインド洋から紅海に入り、イスタンブールに運ばれるルートである。17 世紀後半と 17 世紀末～18 世紀前半では唐船が扱う商品が異なるだけで、展海令によってインド洋海域で活動する商人に変化があったわけではない。18 世紀の陶磁器貿易のあり方を示す資料として、紅海のサダナ島沖で沈んだ沈没船資料がある。イスラーム商人の船であり、東南アジアで購入した中国磁器を積んで、インド洋を渡り、紅海を北上していた途上で沈んだものである。この積荷の中にはトプカプ宮殿のコレクションに見られるものも含まれている。中世以来続くインド洋における陶磁器交易の一般的な形態でもある。

もともとインド洋海域で活動するイスラーム商人やインド系商人の船は東南アジアの港市で中国磁器や伊万里を手に入れており、そのこと自体は 17 世紀後半と変わることはないと考えられる。モンバサに残る金欄手古伊万里の色絵壺などもそうして入手したものと見られる。モンバサに直接持ち込まれたものではなく、東アフリカがオマーンによって支配されたことに伴い、オマーンからモンバサに持ち込まれた可能性も考えることができるが、その場合であってもオマーンはインド洋交易によって入手したものであろう。

よって、展海令公布後もオランダ船による伊万里輸出は継続しており、オランダ船がバタビアなどに運んだ伊万里をイスラーム商人らが購入して紅海経由で運んだ可能性が考えられる。その場合、オランダ貿易の私貿易、すなわち協荷貿易が重要な意味をもつことになるが、協荷貿易については次に述べることにする。

## ②インドネシア周辺の東南アジア

ブトンのウォリオ城で出土している 18 世紀前半の伊万里について、坂井隆はオランダ東インド会社の私貿易によって輸出されたものがバタビアで転売されたものとしている。そして、転売先は華人もしくは南スラウェシからマレー半島に移ったブギス人が中心であったとする（坂井 2010）。

オランダ東インド会社の私貿易，すなわち脇荷貿易による伊万里の輸出はどれほどの規模のものであったのだろうか。これについては山脇悌二郎や櫻庭美咲の研究がある（山脇 1988，櫻庭 2014）。以下，山脇 1988 に基づいて述べる。脇荷貿易自体は，早い段階から行われていたことが推測される。例えば，1651 年の出島評議会の決議録には，東インド総督および東インド評議会が長崎商館長らに宛てて，私貿易を抑制・根絶することや私貿易品を没収し，相応の処分を行うことなどを命じている。オランダ東インド会社は度々，私貿易を禁止する命令を出したが，結局は一定率の運賃および関税を課すことで，1667 年には私貿易弛禁令によって伊万里の脇荷輸出も公認した。山脇は，それに先立つ 1662 年の伊万里焼物商人による出島への出店許可についても，脇荷商売のために店を出すことを許されたものと考えている。そして，寛文・延宝・天和期に脇荷として輸出された伊万里の総量について年平均 5 万個，総数 115 万個と推定している。唐船による輸出高には及ばないが，オランダ東インド会社の公貿易の記録をはるかに凌ぐ数値である。

金襴手古伊万里の生産年代となる 17 世紀末以降となるとさらに増加している。貞享・元禄期には年平均 7 万個，総数 133 万個（貞享 2 年～元禄 16 年），宝永・正徳期には年平均 7 万個，総量 63 万個，享保 8 年までの 7 年間には 49 万個，すなわち貞享から享保 8 年まで 245 万個の伊万里が脇荷で輸出されている。しかもこれが控えめな推定値であることが，実数を確認できる正徳元年，正徳 2 年，宝永 6 年の記録をみると明らかである。これは総輸出货量を示す「阿蘭陀船日本にて万買物仕，積渡寄帳」の数値から，長崎商館の公式輸出货量を示す「商館仕訳帳」の数値を差し引いて，脇荷貿易による輸出货量を割り出したものである。

宝永 6 年（1709）（82323 個と蓋茶碗 413 組，ひな道具 5334 組）—7860 個＝



(74463 個と蓋茶碗 413 組, ひな道具 5334 組)

正徳元年 (1711) 158,583 個－9,000 個＝149,583 個

正徳 2 年 (1712) 181,926 個－0 個＝181,926 個

山脇は、会社が輸出を止め、あるいは減らした分が脇荷として受け継がれたとしているが、18 世紀前半の伊万里の輸出は脇荷貿易によって支えられていたとも言える。これらの中に金襴手古伊万里の製品が含まれていることは明らかである。宝永 6 年の記録の中にある「猪口皿 49196 個 (脇荷 44336 個)」、正徳元年の記録の中にある「ちやく皿大小 90012 個 (脇荷 85012 個)」, 正徳 2 年の記録の中にある「ちやく皿 158640 個 (脇荷同数)」をみると、猪口皿 (ちやく皿) が全体の 70% (年によっては 87%) を占めている。藤原友子は猪口皿について、猪口と皿の組み合わせ。すなわちカップアンドソーサーではないかと推測している (藤原 2000)。妥当な解釈と思われる。当時、有田では金襴手古伊万里のカップアンドソーサー大量に生産されており、アムステルダムでも数多く出土し、伊万里の中で最大の割合を示すという (パート 2000)。コーヒー、茶、チョコレートなどの嗜好品の普及によって爆発的な需要が生まれたものと思われる。

ここで本題に戻ろう。プトンのウォリオ城で出土している金襴手古伊万里は、これら脇荷貿易によって大量にバタビアに輸入されたものが転売されて運ばれたとする坂井の考えは妥当なものとする。これはプトンに限らず、チルボンなどにおいても同様と考えられる。一方、唐船によって長崎から積み出された伊万里の一部が運ばれた可能性も残されている。展海令以後、唐船は伊万里から中国磁器に切り替えて交易するようになるが、伊万里を全く扱わなかったわけではない。後に述べるように、特に 18 世紀に一時期、清朝が海禁を行った際には大量の伊万里を長崎から積み出していた。そのため、唐船が長崎から広東やマカオなどに運んだものがアジア域内の交易によって、プトンやチルボンにもたらされた可能性を考えることができるが、プトンやチルボンの位置すなわちバタビアとの距離を考えると、オランダ船の脇荷貿易の一部である可能性の方がやはり高いように考える。

### ③メキシコを中心とした中南米

メキシコを中心とした中南米に陶磁器が持ち込まれるルートは大きく2通り想定される。一つはマニラとアカプルコを結ぶガレオン貿易によって運ばれるものであり、もう一つはヨーロッパ市場に出回ったものが大西洋を越えて運ばれるものである。ガレオン貿易のアジア側の拠点のマニラ、そして、長崎からマニラへの中継地となる台湾やマカオの調査によって17世紀後半にはガレオン貿易によって太平洋を越えて伊万里が中南米に運ばれていたことが明らかになっているが、18世紀前半の伊万里のルートについてはまだよくわかっていない。マニラでも展海令直後の17世紀末の伊万里の製品までは出土が確認されているが、金襴手古伊万里の生産年代の主体となる18世紀前半の伊万里はまだ確認されていないからである。

中南米における伊万里の分布範囲が17世紀後半においてはメキシコ、グアテマラ、キューバ、コロンビア、ペルーなど広範囲に及んでいるのに対し、18世紀前半の伊万里の発見例はメキシコおよびキューバに限られている。伊万里を含めてマニラに輸入する物資は唐船によってもたらされており、唐船はガレオン貿易そのものを支えていたといってもよい。唐船による陶磁器貿易が中国磁器を対象としたものに立ち戻るということは、マニラに伊万里が持ち込まれる主要ルートが失われることを意味する。量的に減少し、流通範囲が縮小したことはその影響であることは確かである。

しかしながら、唐船が長崎から輸入しなくともマニラのスペイン人たちが伊万里を入手できないわけではない。ブトン島のウォリオ城の例のようにバタビアで転売されたものを入手することができるからである。その場合、やはり唐船によってバタビアなどからマニラに運ばれたものと考えられる。

また、清朝は18世紀においても一時海禁を行なっている。1717年に再び海禁を行い、ジャワ・マニラ方面への出洋・貿易を抑えている。その後、1723年から広東・福建・浙江の順に海禁の解除が行われ、福建の洋船が出海・貿易を許されたのは1727年、浙江が許されたのは1729年であったという。この間、中国磁器の南洋方面への輸出は止まり、唐船は長崎から広東・マカオに毎年、多量の磁器、すなわち伊万里を輸出したことを商館日記は記している。この再

海禁はオランダ船の脇荷貿易にとって好条件となっただけでなく、唐船による長崎からの直接輸出が行われ、伊万里の大量輸出につながっている。それは特に「受皿付茶碗」であったという。前に挙げた「猪口皿」すなわちカップアンドソーサーであることは疑いない。前にも述べたように金襴手古伊万里のカップアンドソーサーはメキシコ各地の遺跡で発見されている。生産年代の細かな検討が必要であるが、この再海禁との関わりも考慮に入れる必要があろう。

まだマニラにおいてはカップアンドソーサーも含めて金襴手古伊万里の製品の出土は確認されていないが、このことは必ずしも金襴手古伊万里がマニラを経由していない証左にはならない。17世紀後半の伊万里も2004年になって初めて出土例が確認されたものであるし(野上2013)、チョコレートカップのように中南米では大量に出土しているが、マニラを含めたフィリピンでは少量しか出土が確認できないものもある。マニラの税関記録にもチョコレートカップの輸入記録は見られるので、マニラを経由したことは確かである。マニラに輸入されたものの中でも中南米に輸出することが目的のものについては、マニラに残される量が少ないということであろう。17世紀後半の製品に比較して量的には少ないと考えられるが、今後、確認される可能性は高いと考える。

## 5 金襴手古伊万里の輸出の終焉

オランダ東インド会社は、宝暦7年(1757)を最後に会社としての伊万里の輸出を打ち切っている。会社としては完全に中国磁器の貿易に立ち戻ったのである。しかしながら、オランダ船が全く輸出しなくなったわけではないようである。商館職員、船員らの個人の売買荷物の輸出である脇荷貿易、いわゆる私貿易が行われた可能性があるし(山脇1988)、前に述べたように高浜焼窯では明和3年(1766)から安永7年(1778)にかけて、オランダ向けの製品の焼成を試み、販売に漕ぎ着けている。その他、有田にも「唐阿蘭陀向け焼物商売」の商人がいて、『有田皿山代官旧記覚書』の明和7年(1770)条には、「近年、有田皿山陶器、唐・阿蘭陀向けが不景気につき、当年よりは右商人10人を定める。」とあり、生産地側では引き続き、輸出向けの商売を行なっているよう

である。さらには明和2年(1765)に小城藩用達長崎本五島町在住の藤井二兵衛が「阿蘭陀向け焼物商売方」をしており、皿山に対する焼き物仕入銀が滞っていることが記録にある(大橋2002)。しかしながら、18世紀後半の海外向け製品には、有田の染付芙蓉手皿、染付蓋付便器などがあるが、金襴手古伊万里のような色絵製品はほとんど見ない。高浜焼で有田の金襴手古伊万里を模倣した色絵壺が見られるぐらいである。オランダ向けのオランダ貿易自体の衰退に加え、チャイニーズ・イマリやヨーロッパの金襴手古伊万里写しが大量に出回ることによって、金襴手古伊万里の輸出品としての役割を終えることになったのであろう。

### おわりに —— まとめにかえて ——

金襴手古伊万里は主に18世紀前半に生産され、主にオランダ船によってヨーロッパに向けて輸出された。そのため、ヨーロッパはもちろんオランダ船のルート上のバタビア、ケープタウンなどに残されている。しかしながら、金襴手古伊万里はオランダ船のルート上ではないところでも発見されており、今回はそれらの製品の流通経路を検討しながら、当時の陶磁器貿易を考察した。とりわけ旧来のアジアの海上交易の姿を明らかにできないか考えた。

その結果、東南アジア、インド洋など各海域・地域の旧来の海上交易の交易網は形を変えながらも基本的にはそのまま機能していたと考えられる。大航海時代以降、ヨーロッパ諸国がアジアに進出し、直接にアジアとの貿易を行うようになった。インド洋世界にはまずポルトガルが進出し、やがてオランダが主導権を握るようになり、その後、イギリスがそれに代わった。一方、スペインはガレオン船による太平洋貿易によってアジアとつながった。これらのヨーロッパ諸国の進出は旧来のアジアの海上交易に大きなインパクトを与えたことは確かであるが、東南アジアでは唐船、インド洋海域ではイスラーム商人やインド系商人の船が陶磁器を運んでいた。太平洋を経て中南米につながるガレオン貿易の起点のマニラに陶磁器を持ち込むのも旧来と同じ唐船であった。

また、金襴手古伊万里の生産と流通を見てみると、改めてオランダ貿易の中

で占める脇荷貿易の地位の大きさを知ることができる。確かに展海令の公布による中国磁器の再輸出の本格化によって、伊万里の海外輸出は全体的にみると大きく減退している。東南アジア市場を丸ごと失い、インド洋海域においてもアメリカ大陸においても流通量はとても小さいものになるわけであり、生産地側においても肥前一带で生産していた海外向け製品（例えば染付見込み荒磯文碗など）が消え、中には窯場そのものが消失するところもあるほどの減退であった。しかしながら、とりわけヨーロッパに関してはむしろ展海令以前よりも伊万里の輸出量が増えているのではないかと思われる。会社の公式貿易自体は減退しているので、伊万里の輸出量の増加は主に脇荷貿易によるところが大きいのである。

もちろんヨーロッパ市場も中国磁器に奪還されるのであるが、相対的な地位は低くなっても磁器需要そのものが拡大しているので、そのまま輸出量の減少にはつながらなかった。そして、その磁器需要の一つが金襴手古伊万里であった。同じヨーロッパ向けであっても柿右衛門様式の色絵の生産は窯も限られていたが、金襴手古伊万里の色絵素地は有田の内山地区だけでなく、外山地区、有田以外の窯場でも生産された。さらに加えるならば、コーヒー、茶、チョコレートといった嗜好品の普及も金襴手古伊万里の輸出を助けた。17世紀にそれぞれ伝わった飲用の嗜好品が18世紀にかけて普及する過程でカップアンドソーサーが大量に生産され、輸出されるようになった。

そして、チャイニーズ・イマリやヨーロッパの古伊万里写しの生産はまだ続くものの、金襴手古伊万里はほぼ18世紀前半に生産を終える。しかし、この金襴手古伊万里の様式は、幕末から明治にかけての新たな金襴手として受け継がれ、伊万里の代表的あるいは典型的な様式として認識され、かつて「古伊万里」そのものであった。現在でも伊万里という言葉でまず思い浮かべる様式となっている。

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375 の助成を受けたものです。

## 引用文献・参考文献

- 有田町史編纂委員会 1988 『有田町史 古窯編』有田町
- 大橋康二 1995 「オスマン・トルコ帝国の盛衰と東洋陶磁」『トプカプ宮殿の名品——スルタンの愛した陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館 pp.117-128
- 大橋康二 1996 「絢爛豪華な色絵の出現」『別冊太陽 色絵絢爛』平凡社 pp.70-71
- 大橋康二 2002 「二 海外流通編」『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』伊万里市史編さん委員会 pp.597-876
- 大橋康二・坂井隆 1994 『アジアの海と伊万里』新人物往来社
- 金田明美 2010 「南インド洋モーリシャス島のフレデリック・ヘンドリック城跡出土の肥前磁器について——遺構 F3382 と F3383 から出土の陶磁器の考察——」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会 pp.259-271
- 坂井 隆 1998 『「伊万里」からアジアが見える——海の陶磁路と日本』講談社
- 坂井 隆 2010 「インドネシアの肥前陶磁」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会 pp.187-196
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 『トプカプ宮殿の名品——スルタンの愛した陶磁器』
- 櫻庭美咲 2014 「オランダ東インド会社従業員による個人貿易」『東洋陶磁』44号 pp.75-92
- 佐々木花江 2010 「インド・ゴアで出土した肥前製染付芙蓉手皿」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会 pp.253-258
- 塩田町教育委員会 1998 『上福2号窯跡調査報告書』町内古陶磁窯跡発掘調査2
- 白谷達也・上野武 1986 『海を渡った古伊万里 セラミックロード』朝日新聞社
- たばこと塩の博物館 2009 『ガレオン船が運んだ友好の夢』
- トゥンジャイ、ヒュリヤ 1995 「トプカプ宮殿博物館と中国及び日本の陶磁器」『トプカプ宮殿の名品——スルタンの愛した陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館 pp.113-116
- 中島浩氣 1936 『肥前陶磁史考』（復刻版1985 青潮社）
- 中山 圭 2016 「近世天草陶磁器の海外輸出」『世界とつなぐ 起点としての日本列島史』清文堂出版 pp.121-170
- 野上建紀 2002 『近世肥前窯業生産機構論——現代地場産業の基盤形成に関する研究——』（博士論文：金沢大学）
- 野上建紀 2010 『国史跡天狗谷窯跡』有田町教育委員会
- 野上建紀 2013 「ガレオン貿易と肥前磁器——二つの大洋を横断した日本のやきもの——」『東洋陶磁』第42号 pp.141-176
- 野上建紀 2015 「清朝の海禁政策と陶磁器貿易」『金沢大学考古学紀要』37号 pp.

43-52

- 野上建紀 2017 『伊万里焼の生産流通史——近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版
- 野上建紀・パイケイトル、クリスティネ ファン デア 2010 「1659年沈没のアーフォントステル号で発見された肥前磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会 pp. 272-275
- 野上建紀・李匡悌・盧泰康・洪曉純 2005 「台南出土の肥前磁器」『金大考古』48号 金沢大学考古学研究室 pp. 6-10
- バート、ヤン M 2000 「アムステルダム の日本磁器出土遺物」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館 pp. 206-220
- 福田安志 2018 「第八章 インド洋交渉史」『改訂新版 新書アフリカ史』（宮本正興、松田素二編）講談社 pp. 234-272
- 藤原友子 2000 「『古伊万里の道』展について」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館 pp. 143-165
- 三上次男 1988 「メキシコの中国陶磁」『陶磁貿易史研究 中 南アジア・西アジア篇』（三上次男著作集二）中央公論美術出版 pp. 303-310
- 三杉隆敏 1986 『世界の染付 6』同朋舎出版
- 山本信夫 2010 「インドの肥前磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会 pp. 251-252
- 山脇悌二郎 1988 「貿易篇—唐・蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史 商業編 I』有田町史編纂委員会 pp. 265-410
- 方真真 2006 『明末清初台湾与馬尼拉的帆船貿易（1664-1684）』稲郷出版社
- 盧泰康・野上建紀 2008 「澎湖馬公港与金門所發現の肥前瓷器」『史物論壇』第6期 pp. 93-119
- Sasaki, Tatsuo 1989. Trade Ceramics from the Coast of the Indian Ocean. I. *Journal of East-West Maritime Relations*, vol. 1 pp. 117-165

なお、本論中に使用した図版について、典拠が示されていないものは全て筆者が撮影・作図したものである。



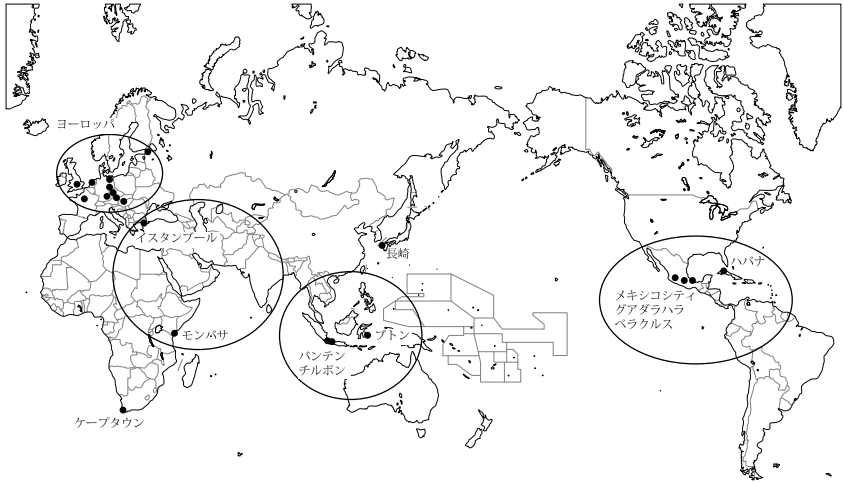
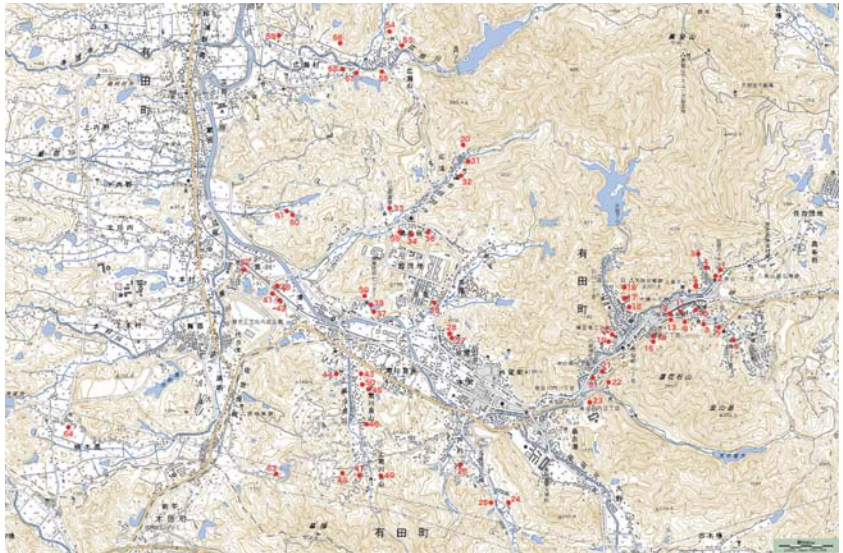


図1 金襴手古伊万里の主な出土地および所蔵先の分布図



- |           |          |             |             |               |           |            |
|-----------|----------|-------------|-------------|---------------|-----------|------------|
| 1 桶木谷窯跡   | 11 前登窯跡  | 21 天神町窯跡    | 31 弥源次窯跡    | 41 清六ノ辻大師堂横窯跡 | 51 岩中窯跡   | 60 迎の原窯跡   |
| 2 釈蔵窯跡    | 12 西登窯跡  | 22 猿川窯跡     | 32 窯の谷窯跡    | 42 清六ノ辻2号窯跡   | 52 ノノ瀬窯跡  | 61 迎原高麗神窯跡 |
| 3 年本谷1号窯跡 | 13 大樽窯跡  | 23 長吉谷窯跡    | 33 山辺田窯跡    | 43 小物成窯跡      | (地図外)     | 62 登辻窯跡    |
| 4 年本谷2号窯跡 | 14 白焼窯跡  | 24 神門谷窯跡    | 34 多々良の元窯跡  | 44 天神森窯跡      | 53 香茸窯跡   | 63 原明窯跡    |
| 5 年本谷3号窯跡 | 15 谷窯跡   | 25 一本松窯跡    | 35 多々良2号窯跡  | 45 南川原窯ノ辻窯跡   | 54 茂右衛門窯跡 | 64 桶木原窯跡   |
| 6 小樽1号窯跡  | 16 天狗谷窯跡 | 26 向ノ原窯跡    | 36 黒牟田新窯跡   | 46 桶右衛門窯跡     | 55 広瀬向窯跡  |            |
| 7 小樽2号窯跡  | 17 中白川窯跡 | 27 外尾山窯跡    | 37 小溝下窯跡    | 47 桶口窯跡       | 56 小森窯跡   |            |
| 8 山小屋窯跡   | 18 下白川窯跡 | 28 外尾山前組谷窯跡 | 38 小溝中窯跡    | 48 瀬左衛門窯跡     | 57 獅子川窯跡  |            |
| 9 舞々谷窯跡   | 19 柳吉場窯跡 | 29 丸尾窯跡     | 39 小溝上窯跡    | 49 ムクロ谷窯跡     | 58 舟財天窯跡  |            |
| 10 中樽窯跡   | 20 天神山窯跡 | 30 掛の谷窯跡    | 40 清六ノ辻1号窯跡 | 50 平床窯跡       | 59 蔵本窯跡   |            |

図2 有田町内古窯跡分布図



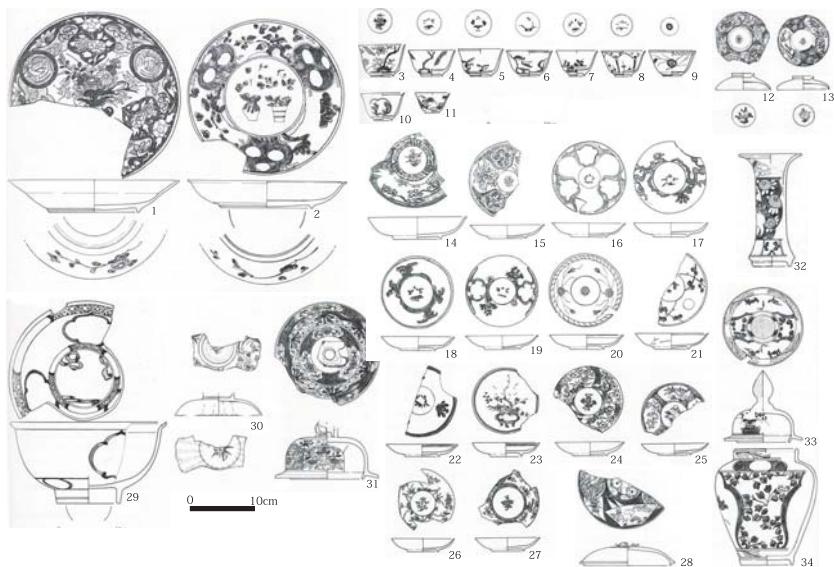


図3 赤絵町遺跡出土の金襴手古伊万里の色絵および色絵素地

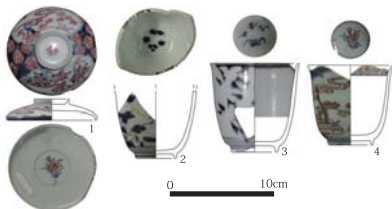


図4 赤絵町遺跡出土の色絵チョコレートカップおよび色絵素地

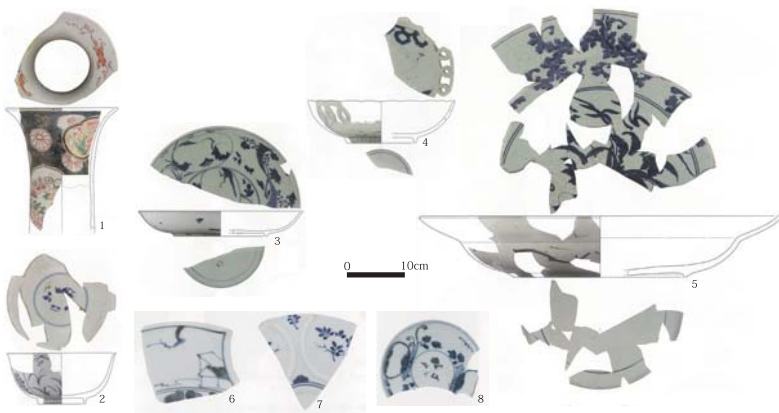


図5 中樽1丁目遺跡出土の金襴手古伊万里の色絵および色絵素地 (6～8はスケール不同)



図6 有田古窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地（左：猿川窯、中：穉古場窯、右：白焼窯）

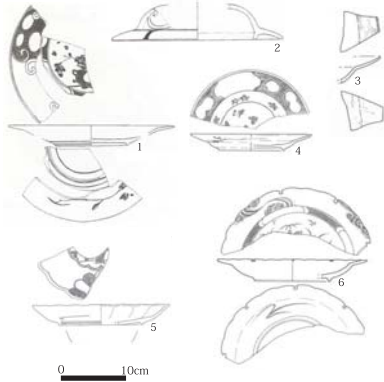


図7 有田古窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地（1・2：下白川窯、3：白焼窯、4：多々良の元窯、5：窯の谷窯、6：外尾山窯）



図8 南川原窯ノ辻窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地



図9 多々良の元窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地

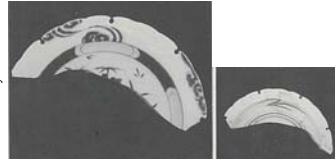


図10 外尾山窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地

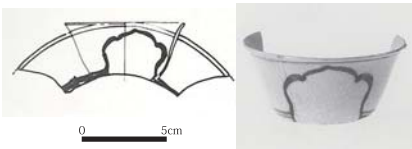


図11 上福2号窯出土の金欄手古伊万里の色絵素地



図12 高浜焼の色絵壺・皿



図13 モンバサ・フォートジーズ博物館所蔵の色絵壺



図14 トプカブ宮殿所蔵の色絵蓋付鉢



図15 バンテン・ラーマ遺跡出土の色絵および色絵素地



図16 プトン・ウォリオ城出土の色絵壺など



図17 チルボンのスナン・グヌンジャティ廟と古伊万里 (白谷・上野 1986)

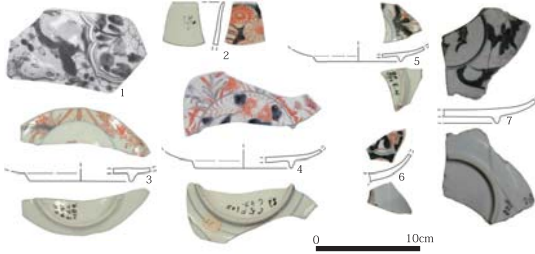


図18 メキシコ出土の金襴手古伊万里 (1～5:メキシコシティ、6:オアハカ、7:ベラクルス 1のみスケール不同)



図19 副王領博物館所蔵の色絵チョコレートカップ



図20 カサ・デル・リスコの装飾壁と色絵チョコレートカップの蓋 (右の丸印)



図21 グアダラハラの大聖堂の聖具室と金襴手古伊万里の色絵壺



図22 ハバナ所在の金襴手古伊万里の色絵壺 (左:ハバナ市博物館、右:「アジアの家」博物館)



the historical role performed by the You Prefecture legates during the tumultuous era of the fall of the Tang and the rise of the Five Dynasties, I have attempted to clarify, via concrete examples, the process by which “Central Eurasian-style States” emerged out of the An Lushan Rebellion. I also shed light on two features of this period: Firstly, following the Huang Chao Rebellion, the You Prefecture legates expanded their power in practically the same manner as the forces of the Shatuo in Shanxi. Secondly, the You Prefecture legates also secured an accord with the Khitan with respect to the issue of their border regions. However, the accord between the You Prefecture legates and the Khitan was less comprehensive than the Treaty of Yun-zhong 雲中會盟 signed between the Shatuo and the Khitan, and the Lulong 盧龍 legates were unable to secure the support of the Khitan. The Lulong legates worked to repair the damage caused by their blunder of neglecting the alliance, and soon made rapid progress. In this sense, the Lulong legates can be thought of as akin to an archetype of the Shatuo dynasty. In short, the Lulong legates were an indispensable prelude to the development of the Shatuo and the Khitan into “Central Eurasian-style States.”

## THE PRODUCTION AND DISTRIBUTION OF *KINRANDE*-STYLE *KOIMARI* EXPORTED FROM NAGASAKI

NOGAMI Takenori

Imari ware was the first porcelain produced in Japan. It was initially produced in and around Arita in the early 17th century. It was called “Imari” because that was the name of the port from which it was shipped. In the mid-17th century, the Ming dynasty was replaced by the Qing, and due to the resulting confusion, the export of Chinese porcelain ceased. Imari ware was exported instead and shipped all over the world. One variety of Imari ware was known as *Kinrande Koimari* 金襴手古伊萬里.

*Kinrande Koimari* is one of the representative porcelains of Imari ware. It is glittering porcelain that combines cobalt blue (*sometsuke* 染付) and overglazed enamel (*iroe* 色繪). The production began at the end of the 17th century. It was mainly produced in Arita and exported from Nagasaki. It was principally transported to Europe via Batavia and Cape Town by Dutch ships and displayed in royal castles and palaces in Europe. Chinese porcelains were once again thriving and being exported. Imitations of *Kinrande Koimari* were produced in large

quantities at Jingdezhen, and these were called “Chinese Imari” or “Chinese Japanese.” Moreover, *Kinrande Koimari* was also imitated in kilns throughout Europe.

*Kinrande Koimari* was also transported to regions outside Europe by ships other than those of the Dutch. Imari ware has been found in Indian Ocean waters, the Middle East, Southeast Asia around Indonesia, and Central and South America centering on Mexico. Islamic merchants bought the *Kinrande Koimari* that Chinese and Dutch ships had brought to Southeast Asia and sent it around the Indian Ocean area and the Middle East. The *Kinrande Koimari* that Dutch ships brought to Batavia was spread throughout Indonesia. And some that was brought to Southeast Asia was taken to the Americas by a Spanish ships.

In addition, the spread of beverages such as coffee and tea as well as chocolate also promoted the export of *Kinrande Koimari*. With the spread of such luxury items, large numbers of *Kinrande Koimari* cups and saucers were also produced and shipped around the world.

In the middle of the 18th century, the Dutch East India Company ended the official trade in Imari ware, and the production of *Kinrande Koimari* nearly ceased. However, in the 19th century, a type of Imari ware, which resembled *Kinrande Koimari*, was again produced, and it remains today as a representative style of Arita overglazed enamel ware.